

# 「非在」である外国人メイドの語り

## Hilary Mantel の “The School of English” における言葉の不自由さ

梅川桂子

### 1. はじめに

Hilary Mantel (1952-2022) 晩年の短編小説 “The School of English” (2015) (以下 “School”) に観察される外国人ハウスマイドの「非在」性に着目する。Mantel は、常に周縁者の立場や視点に立っており、出世作 *Wolf Hall* 3 部作 (2009, 2012, 2020) では歴史的敗者であるトマス・クロムウェルの新たな像を描き出している。“School” は London Review of Books に掲載され、*The Assassination of Margaret Thatcher* (2015) に収録された短編で、「言葉の獲得の必要性」や「弱者の代弁者としての語り」にこだわってきた Mantel の思想が作品の背景や登場人物の造形に取り込まれている。難民と推測されるマルセラの受難を描く本作品においても「言葉」に焦点をあてるとマルセラの「非在」性が顕著になり、語りの不確かさは異なる解釈を可能とする。本発表では、「非在」という存在を定義した上で、「非在」性がもたらすマルセラの存在の不確かさと言葉の使用の困難さを考察し、「作者が提示した物語を各読者が自身で解釈すべきであり、事実は幾通りにもありうる」との Mantel の思想が読み取れる点を指摘する。

### 2. 「非在」という存在

小野は「強制収容所や難民収容所にいた人々は人権の概念を適用されず、人間以外の何ものでもない」(36) の考え方を、日本における水俣病患者らに当てはめく非在>と形容する。牧野は「国民国家崩壊により、人々は一切の法的保護を剥奪された無権利で無防備な状態になる」(32)と述べている。現代でも、マルセラのような難民女性たちは、国家に守られず意思や権利を主張できない弱者であり、国際的分業制の最底辺で労働を提供する存在でもある。当事者が語る必要性を説くスピヴァクは、『いくつもの声』において、自らは語ることでできない下層階級の不法移民たちを「新たなサバルタン」と名付けているが、“School” は「新たなサバルタン」の一人として難民である外国人メイドの受難を描く。本発表では、権利を剥奪され、正しく意思を伝えることができない不可視な弱者であるマルセラのような存在を「非在」者と定義する。

#### 3.1. マルセラら移民女性の「非在」性

マルセラのような移民女性が、シェルター替わりの部屋で肩を寄せて過ごし、美しく着飾ったモデルが表紙の雑誌を “passed *The Lady* hand to hand” (209) と次々と手に取り求人広告を読み込む構図は、“School” 全体を貫く不均衡である。屋敷の住人は住み込みメイドの募集を載せ、定住場所を求める難民女性はそれをむさぼり読む。メイドの立場は弱く、“The salary promised was small, but she needed a roof over her head.” (209) と、悪条件でも寝場所を得ることを優先せねばならない。メイドはまた、“the caprice of an employer” で解雇されてしまえばシェルター以外に行き場を失う不安定な存在である (217)。女性らは、毛布や寝袋から生気のない顔を覗かせて眠り、目が覚めた際には “they hardly knew their own names.” (210) と、もはや自分の名前すら確かでない。「個」としての特性を失った移民女性は取り換え可能な存在で、面接した女性と異なる女性が現れても雇用主には識別不可能である。このように外国人メイドら移民女性は社会内で「非在」性を有している。

#### 3.2. 雇用先におけるマルセラの「非在」性

外国人メイドは、雇用家庭においても権利を剥奪された「非在」状態にある。マルセラは、狭い屋根裏部屋でキャビネットの引き出しにマットを引いて寝るように指示される。“I would rather have a proper bed” (227) と言いたいが、女主人の顔色を窺い口には出さない。その屋根裏部屋ですらマルセラの自由には使えず、雇用先夫婦は抜き打ち検査を行い、マルセラが ‘I have led sheltered life’ (229) の経験から保管していたと主張してもシリアルバーを取り上げる。雇用夫婦は、マルセラが大柄な少年と一人で対峙する際の危険にも配慮していない。屋根裏部屋で暴力をふるおうとする長男を前にして “In advertising, Sir, Mike, you did not state, ‘sole charge’. If you had stipulated, I would have said, who, me, Marcella, control that large boy?” (223) とマルセラは心の中で叫び、性的暴力を防ぐよりも数少ない自分の持ち物を守ることを選択する。スピヴァクが難民女性はただ生き延びることを優先する (65) と述べるように、「非在」であるマルセラにとり、働くための身体とわずかな衣服がまず守るべきものだからである。

#### 3.3. 言葉の使用の困難さと雄弁な行動や痕跡

適切な英語教育を受けていないマルセラは、英語を正しく使用できない。暴力を受けた後でも、新聞の職業紹

介欄で“Work waiting” (School 245) の文字を目にすると、自分の履歴書に“Marcella is always willing.” (245) と誘い文句と誤解される表現を用いてしまう。新雇用先の執事が、同情しながらもマルセラにも責任があると述べるのは ‘We cannot choose what world we live in’, ‘Though we can perhaps choose our School of English.’ (240) と、マルセラの英語力が誤解を生むと考えたからである。言語が誤解の起因である一方、行動や身体に残る痕跡はしばしばより雄弁である。雇用家庭内のマルセラが単に “a body with a bucket shrank past them on the stairs.” (218) とされていることは、長男の友人たちがマルセラの仕事を故意に邪魔する態度にも示される(221)。暴力により “in black out, in absence” (246) な状態となったマルセラは、雇用先の幼い娘のベッドで目を覚ました際に激しい背中中の痛みを感じたため、階段を引き摺り降ろされ、娘のベッドでレイプされたのだと考える。娘の思いやりは、暴力で気を失ったマルセラの顔を心配そうに見ながらハンカチで拭っている仕草に示されている(243)が、娘は言葉を発していない。

### 3.4. 最周縁である移民女性が被る性被害

スピヴァクは「女性の身体は暴力を受けやすく、境界を侵されやすいものとみなされている」 (116) と語るが、「非在」な女性は特に性被害の対象になりやすく、それは密室状態ではより鮮明となる。家族が留守の間に長男から暴力を受けたマルセラに、新雇用先の執事は暴行の経緯を話すように強く促す。屋根裏部屋に侵入してきた長男に、自ら服を脱ぐと申し出て長男の意向に同意したと言うと、執事はようやくマルセラを解放する (240)。マルセラは、意に反して長男からは身体的暴行を加えられ、さらに執事からは暴行の経過を告白するよう強要されるというセカンドレイプも避けることができない。

### 4. 「非在」者の個としての曖昧さとその不特定多数性

暴行の酷さ及びそれがもたらした結果ゆえに終盤は陰惨な雰囲気覆われるが、最終段落でマルセラの語りには不確実性がもたらされる。マルセラは屋根裏部屋で殴られた後に気を失っていたのであり、“She is no longer sure that the facts were exactly those she had given to the butler. It may be she has been a fabricator.” (246-247) と記憶がないのだから、執事に話した内容は真実ではないかもしれない。語り手はさらに “you cannot tell these friends apart. When they rolled in their blanket, only heads visible” (247) であるのだから実は他の女に起こったことかもしれないと続ける。マルセラの「非在」な不可視性は、マルセラを「非在」集団のなかに埋没させるのである。Mantel は 2015 年に行われたインタビューで、フェミニズムについて具体的に語るより、一例を示された読者が読後に振り返って何度も考えるような作品に取り組むのが作家のすべきこと (Pollard 154) と答えている。仏革命を語り直した Mantel 初期の作品 *A Place of Greater Safety* の前書きには、“I am very conscious that a novel is a cooperative effort, a joint venture between writer and reader. I purvey my own version of events, but facts change according to your viewpoint.” (*A Place* ii) と、読者の観点で事実は異なってくると記している。このように、Mantel は常に作者が提示した物語を各読者が自身で推敲して解釈すべきであると主張している。本作品 “school” では、マルセラの語ってきた内容を終盤で曖昧とすることで、社会階層の底辺にいる「非在」なメイドの問題について考えることを受け取り手に促している。

### 5. さいごに

本作品は「目を開けると、泣きながら自分の顔の血を拭ってくれている娘がみえる」 (248) ことを、マルセラが夢現に思い出す場面で終わる。激痛から暴行を受けたことを自覚した時とは異なり、娘の後ろからは明るい日光が射している。このような幕引きからは、自身を貧しいアイルランド移民の子孫 “line of nobody” と述べる Mantel が、その代理として語る「非在」な外国人メイドへ階級的共感を示しているのだと解釈できる。Mantel は、弱者の視点からの歴史の語り直しを通して、新たな見方を提示し、異なる事実の可能性を提示する作家である。“School” で語られるマルセラの物語は、“work from particular to the general and back again” (Pollard 154) のように、マルセラ単体のものではなく不特定の犠牲者の一例である。Mantel は、マルセラの描写を通して「非在」な女性達の問題を提示しているのである。

### 参考文献

Mantel, Hilary. *A Place of Greater Safety*. Atheneum, 1993.

—. *The Assassination of Margaret Thatcher*. The Fourth Estate paperback edition, 2015.

—. Pollard, Eileen, and Ginette Carpenter, editors. *Hilary Mantel: Contemporary Critical Perspectives*. Bloomsbury Academic, 2020.

小野文夫 『<非在>のエティカ』東京大学出版会、2022年。

ガヤトリ・C・スピヴァク 『いくつもの声』星野俊也編、本橋哲也、篠原雅武訳、人文書院、2014年。

牧野雅彦 『今を生きる思想 ハンナ・アレント 全体主義という悪魔』講談社現代新書、2022年。